

ヘミングウェイと日本 —— 雑誌記事、ある日本人との関わりを中心に ——

上垣公明*

Hemingway and Japan

—— focusing on an article of magazine and relation with a Japanese ——

Kimiaki Uegaki

はじめに

ヘミングウェイ(Ernest Hemingway,1899-1961)の作品が初めて日本に紹介されたのは非常に早く、最初の作品としては1930年に短編「白い象のやうな丘」(“Hills Like White Elephants”,1927)の翻訳が『詩と詩論』の8月号に掲載されている。その後も、彼の作品は多くの読者を獲得してきた。たとえば、彼の代表作の一つである『老人と海』(*The Old Man and the Sea*,1952)の新潮社文庫での翻訳(福田恒在訳)は2009年6月の時点で109刷を数えているが、そのことも日本でのヘミングウェイの人気の高さを示すものと言える。この刷数については、例えば代表的なアメリカの同世代の作家であるジェラルド(F. Scott Fitzgerald,1896-1940)の代表作『華麗なるギャツビー』(*The Great Gatsby*,1925)の翻訳(野崎孝訳、新潮社文庫)が73刷(2009年5月の時点)、また、スタインベック(J. Ernst Steinbeck,1902-1968)の代表作『怒りの葡萄』(*The Grapes of Wrath*,1939)の翻訳(大久保康雄訳、新潮社文庫)が62刷(2009年5月の時点)であることと比較しても、その多さが窺える。

ヘミングウェイの代名詞とも呼べる「ハードボイルド」や「氷山の理論」といった創作手法に言及するまでもなく、彼の文学が世界中の多くの作家に多大な影響を与えてきたことは周知の通りであり、しばしば取り上げられるところでもある。その一方で、日本や日本の作家から彼がどのような影響を受けたのか、あるいは、それをどのように捉えていたのかについては、あまり注目されてこなかったと言わざるをえない。そこで、小論では主として、その点に注目したい。

しかしながら、ヘミングウェイにおける日本や日本の作家からの影響を示す具体的な事例は見出しにくいのが現状である。ところが、ヘミングウェイによる日本や日本人への言及については、雑誌記事や手紙にいくつか見出すことができる。小論では、それらを通して、ヘミングウェイがどのように日本や日本人を捉えていたのかについて、その一端を探ってみたい。また、小論の後半では日本と彼との係わり合いをさらに把握するために、日

*大阪電気通信大学 准教授

本におけるヘミングウェイの研究について、特に初期の状況を中心に概観する。

1. 雑誌記事について

ヘミングウェイによる日本への言及で注目すべきものとして、1923年9月25日付の『トロント・デイリー・スター』誌(*The Toronto Daily Star*)に掲載された「日本の地震」(“Japanese Earthquake”)という記事がある。この記事はタイトルが示すように関東大地震についてのものであるが、それが発生したのは1923年9月1日の正午であり、この記事は地震発生から約一ヶ月後に出されたものということになる。記事では、関東大地震による横浜の街の被害状況が主に扱われているが、その一方で、それを取材した記者の主観的な視点からの記述が多く含まれている点で非常に特徴的である。関東大地震の直後にアメリカ人と思われる男女二人の雑誌記者が日本人の家を訪れ、そこで行ったインタビューを中心に、話は展開していく。インタビューが行われたのは、記事の内容からすると地震発生から数週間後のことであると推測される。

このインタビューにおける雑誌記者と日本人の親娘の発言、振る舞い、服装の描写には、記者の視点からの日本人や日本文化に対する印象や捉え方が色濃く反映されていることが窺える。さらに、その背後に、この記事の作者であるヘミングウェイ自身のそれらを見て取ることも可能であろう。まずは、この記事の冒頭から見ていくことにする。

There are no names in this story.

The characters in it are a reporter, a girl reporter, a quite beautiful daughter in a Japanese kimono, and a mother. (104)

このような始まり方は、一般的な雑誌記事のそれとは趣が異なり、非常に抽象的な印象がもたらされるものとなっている。また、ここでは娘が「日本の着物を着たかなり美しい娘」と描写されているが、このような女性の美と着物の組み合わせは記者の日本人女性に対する美意識の一端を示しているように思われる。

このように登場人物が紹介された後、二人の雑誌記者による取材の様子が描かれていく。記者たちが日本人の親娘の家を訪ねたときに最初に姿を見せるのは娘の方であるが、その時の様子を見てみよう。

The door opened one narrow crack. The crack ran from the top of the door to the bottom, and about half way up it was a very dark, very beautiful face, the hair soft and parted in the middle.(104)

少し裂けた戸から少女が顔を覗かせているが、このような「裂けた戸」と「少女の美しさ」

という組み合わせは一見不釣り合いなものである。しかし、そのような対照的な組み合わせによって、彼女の美しさが自ずと際立たされることになっている。また、暗闇から覗き見られる少女の黒い髪の毛についての言及もあり、記者が髪の毛に強い興味を抱いていることが窺える。その後も、男性記者による彼女の美しさを称賛する次のような感想が続く。

‘She[daughter]is beautiful, after all,’ thought the reporter. He had been sent on so many assignments in which beautiful girls figured, and so few of the girls had ever turned out to be beautiful. (104)

男性記者が少女の美しさを確信している様子が明確に見て取れるが、この描写が男性記者の視点からのものであることも、彼女の性的な魅力を喚起する要因になっていると考えられる。そもそも、この記事は地震についてのものであり、一般的に考えて、女性の外見への言及は特に必要ないはずであるが、それにも関わらず、女性の美しさについての言及がされていることは、記者の日本人女性の美しさに対する関心の強さを示すものであろう。

しばらく娘と二人の記者のやり取りが続いた後、娘は母親を呼びに行く。そのときの様子は **“She went upstairs, quick and lithe, wearing Japanese Kimono (104)”** と描かれるが、このような「素早く、穏やかに」という描写からも、日本人女性の振舞いに関する記者の印象の反映を見て取ることができる。さらに、その後も記者の視点から、着物について次のように述べられている。

It [kimono] ought to have some other name. Kimono has a messy, early morning sound. There was nothing kimonoey about this kimono. The colours were vivid and the stuff had body to it, and it was cut. It looked almost as though it might be worn with two swords in the belt. (104-5)

ここでは、記者が娘の着物について、彼自身が「騒がしい、まるで早朝のような響き」と考えるところの「着物」の響きとは異なる印象を抱いていることが読み取れる。また、娘の着ている着物の色は鮮明で生地も厚く、記者にとって着物に対する彼の概念を覆すものであったことも示されている。このような着物への言及の繰り返しについても、前述の例と同じように、地震に関する記事としては不自然であり、着物に対する作者の関心の強さを示すものであろう。

しばらくして、母親が娘と一緒に姿を現す。記者は二人に対して地震発生時の記憶を話すように頼むが、彼女たちは記者たちに不信感を抱いており、それを拒否する。また、記者は、二人の名前を新聞に載せたいと申し出るが、それに対して娘は **“We won’t say a word unless you promise not to use the names” (105)** と頑なに断るのである。このような、彼女たちの頑固で排他的な態度についても、記者の日本人女性に対する印象の反映を見て取る

ことも可能であろう。

新聞記者と彼女たちの間でしばらく口論が続いた後、結局、彼女たちは名前が載らないことを条件に、地震発時や、その直後の様子について話すことを了承する。地震発生時における、彼女たちが乗る予定であった船内の状況について、娘から次のように語られる。

‘Just before twelve o’clock, there was a great rumbling sound and then everything commenced to rock back and forth. The dock rolled and bucked. My brother and I [daughter] were on board the boat leaning against the rail. Everybody had been throwing streamers. It only lasted about thirty seconds,’ said the daughter. (106)

記事では、地震の発生直後だけでなく、発生からしばらくした後の状況にも話が及んでいる。たとえば、地震発生時に地下街にいた人たちの絶望的な状況や、フランスの皇子が横浜の公邸にいたときに地震が発生し、彼を救出できなかったという悲劇などについて、母親から語られる。このような地震発生直後からの悲惨な状況を次々に聞かされるうちに、二人の記者は地震による恐怖の大きさを実感し、彼女たちが最初、地震のことを話したがいなかったことを理解し、彼女たちに同情的になっていくのである。

その後、母親から、地震発生からしばらくして家族全員で横浜を離れて神戸に行き、数日後、夫だけが仕事のために神戸に残り、彼女たちは再び横浜に帰って来たことが語られ、記事は次のように締めくくられる。

‘You [two reporters] understand. No names,’ said the mother.

‘You’re sure? They wouldn’t do any harm, you know.’

‘You said you wouldn’t use the names,’ the mother said wearily. The reporters went out. The friends stood up as they went through the room.

The reporter took a look at the Japanese kimono as the door was shut.

‘Who’s going to write the story? You or me?’ asked the girl reporter.

‘I don’t know,’ said the reporter. (110)

上記のやり取りからは、母親が匿名にするよう執拗に記者に要求している様子が読み取れる。また、ここで話題になっている匿名に関しては、この記事が‘There are no names in this story’(104)という記述から始まっていたことを思い出す必要があるだろう。つまり、このような冒頭の記述は、記者が母娘との約束を守り、彼女たちを匿名で扱ったことの証明にもなっているのである。いずれにしても、冒頭の場面に加えて最後の場面でも匿名に関することが話題になっていることにより、彼女たちの匿名を希望する執着の強さが自ずと印象付けられ、延いては、日本人女性と匿名性という概念が結び付けられることにもなっている。

また、上記の引用において、家の戸が閉じられるときに記者たちが最後に見たものが着

物となっていることも見逃せない。記事のなかで着物についての言及が度々されていたことについては見てきた通りであるが、このように締めくくりの場面で言及されていることが、記者のそれへの拘りの強さを示すものであることは言うまでもない。

このように見てくると、この雑誌記事の基本的な設定としては、震災で被害を受けた日本人の家族についてのインタビューに基づいたものとなっているにも関わらず、取材を受けた日本人の娘についての美しさ、着物、髪の毛、匿名への拘りといった、震災とは直接関係のない事柄が随所に扱われており、それらが非常に印象的なものとして扱われているが窺える。それらの背後に、雑誌記者の視点からの日本人女性に対する捉え方を見出すこともできるであろう。また、このような捉え方が、記事の作者であるヘミングウェイ自身が日本人女性に対して抱く捉え方の一端を示すものであることは想像に難くない。

2. クマエ('Kumae')氏をめぐって

前述の 1923 年の地震の記事とも関連するが、ヘミングウェイと日本人との関係で注目すべきものとして、1923 年の 9 月にヘミングウェイがパウンド(Ezra Pound, 1885-1972)に送った手紙がある。この手紙の日付は関東大地震が発生した直後であり、その手紙の末尾に日本人と思われるクマエ('Kumae')という人物への言及が見られる。

Well write to me [Hemingway]. You [Pound] may save a human life. Any news from Kumae as to his probable death in the quake? Poor fellow. Hope fellow. Hope the ice plant is still upright. Yes yes Poor Kumae. ... (93)

記事では、クマエ('Kumae')氏という日本人と思われる人物が地震に遭遇し、亡くなっているかもしれないという彼の安否に関する情報を、手紙の相手であるパウンドに求めていることが読み取れる。文面からは、ヘミングウェイの彼を心配する切々たる気持ちが伝わってくる。

それでは、ヘミングウェイがこの手紙で心配しているクマエ('Kumae')氏なる人物とは、一体どのような人物なのであろうか。その人物は、日本人画家の久米民十郎氏と考えられる。角田史郎氏の研究によると、久米氏は 1893 年(明治 26 年)に生まれ、学習院で学んだ後、1914 年にロンドンのセント・ジョンズウッド美術学校で絵画について学んだという経歴をもち、ロンドンではパウンドがフェノロサの能のノートを読むのを伊藤道郎氏が助けていたが、伊藤氏を通じて久米氏もパウンドに協力したということである。¹ つまり、久米氏とパウンドとは伊藤氏を介して知り合いになり、一方、ヘミングウェイと久米氏についてはパウンドを介して知り合ったことになる。したがって、ヘミングウェイと久米氏との関係については、パウンドを軸として二つの出会いが重なった結果、生み出されたということになるのである。

さらに、久米氏とパウンドとの交流については、ヘミングウェイ自身の随想録『移動祝祭日』(*A Movable Feast*, 1964) にもそれに関する記述がある。

It [Ezra Pound's studio] had very good light and was heated by a stove and it had paintings by Japanese artists that Ezra knew. They were all noblemen where they came from and wore their hair cut long. Their hair glistened black and swung forward when they bowed and I [Hemingway] was very impressed by them but I did not like their paintings. I did not understand them but they did not have any mystery, and when I understood them they meant nothing to me. I was sorry about this but there was nothing I could do about it.(107)

ヘミングウェイがパウンドのアパートを訪れたときに、日本人画家の絵が彼の書斎に飾られていたとされているが、そのなかには久米民十郎氏のものもあったと考えられる。² また、ヘミングウェイが感銘を受けたのは日本人の髪や振る舞いであり、絵画には感銘を受けなかったという内容も興味深い。記事からは、ヘミングウェイが日本人の絵画に神秘的な要素を見出そうとしていたことも窺えるが、そのことは、ヘミングウェイが日本の絵画について関心を抱いていたことを裏付けるものでもある。

角田氏によると、久米民十郎氏は 1918 年に帰国した後、1920 年の後半にパリに来て前衛的な絵を描いていたが、その後、帰国したということである。再び、彼は 1923 年にヨーロッパへ行くために横浜のホテルに滞在していたときに、関東大地震に遭遇し、死亡したのであった。そして、横浜で大地震が発生したという情報を得たヘミングウェイが、面識のあった久米氏の安否を気遣って、パウンドへの手紙でそのことに言及したと考えられる。

上記のように、ヘミングウェイと久米氏という日本人との間に関わりがあったことは、われわれの興味をかきたてるものであるが、その日本人が日本人画家であったということについても、ヘミングウェイと日本の芸術との不思議な関わりを感じさせるものである。

3. 日本におけるヘミングウェイ研究について

日本にヘミングウェイが紹介された当時の状況が詳しく述べられている資料として、「日本におけるヘミングウェイおよびフォークナー文献」と題された福田陸太郎氏による報告書がある。そのなかで、ヘミングウェイが日本に最初に紹介されてから 1959 年までのヘミングウェイに関する文献等がⅠ著作、Ⅱ関係文献、Ⅲ講演に分類され、詳しく紹介されている。³

それによると、著作に関しては、短編作品では 1930 年に『詩と詩論』8 月号に掲載された伊藤整氏による「白い象のやうな丘」(“Hills Like White Elephants”, 1927) の翻訳が最も古いものである。長編作品では、1930 年に小田律氏による『武器よさらば』(*A Farewell*

to Arms,1929)の翻訳が天人社から出版されており、それが最も古い。また、1941年に大井茂生氏による『誰がために鐘は鳴る』(For Whom the Bell Tolls,1940)の翻訳が青年書房から出版され、また、同年に大久保康雄氏、相良健氏による同作品の翻訳が三笠書房から出版されている。1952年に、大久保康雄氏による『河を渡って木立の中へ』(Across the River into the Trees,1950)の翻訳が三笠書房から出版され、1952年には高村勝治氏による『日はまた昇る』(The Sun Also Rises,1926)の翻訳が三笠書房から出版されている。そして、1953年には福田恒在氏による『老人と海』(The Old Man and the Sea,1952)の翻訳が別冊文芸春秋 31号より出版されている。このように、ヘミングウェイのほとんどの主要な作品の翻訳が原作の出版の直後に出版されており、そのことはヘミングウェイの日本での人気の高さを物語っている。

ミングウェイの全集については、第1、7、8、3巻が1955年に、第2、10、6、9、4、5巻が1956年に、滝川元男、西川正身、谷口陸男、福田陸太郎、大久保康雄、高村勝治、高橋正雄、竹内道之助、福田実、米田一彦、西村孝次各氏の翻訳により、三笠書房から出版されている。

関係文献に関しては、1929年6月に出版された伊藤整氏による「世界現代詩人レビュー—アアネスト・ヘミングウェイ」(『詩と試論』4号、厚生閣書店)が最も古く、一冊の研究書としては1954年10月に出版された志賀勝氏による『ヘミングウェイ研究序説』(英宝社)、1955年5月に出版された高村勝治氏による『ヘミングウェイ』(研究社)、1955年6月に出版された石一郎氏による『ヘミングウェイ研究』(南雲堂)などが最も早い時期のものである。そのうちの一冊『ヘミングウェイ』では、高村氏は「はしがき」においてヘミングウェイをフォークナーとならぶ現代アメリカ文学の双璧として位置づけている。⁴

近年の日本におけるヘミングウェイの研究状況に関して特筆すべきは、1992年に「ヘミングウェイ協会」が創設されたことである。同協会は日本におけるヘミングウェイの研究の一層の推進に主眼をおき、年一回の全国大会に加えて、ワークショップの開催、学会誌やニューズレターの発行などを主な活動としている。また、同協会は1999年にヘミングウェイの生誕百周年を記念して論文集『ヘミングウェイを横断する』を発刊し、その翌年の2000年3月には学会誌『ヘミングウェイ研究』創刊号を発行している。

ヘミングウェイの生誕百周年にあたる1999年には、それを記念して『英語青年』第145巻第5号(研究社、1999)、『ユリイカ』第31巻第9号(青土社、1999)、『Esquire [エスクァイア日本版]』第13巻第9号(1999)等の雑誌がヘミングウェイの特集を組んでいる。これらのことは、現在でも日本においてヘミングウェイが研究対象として高い関心を集める存在であることを示すものである。

おわりに

小論では、ヘミングウェイと日本や日本人との関係について検討してきたが、それらを

通じていくつかの興味深いことが明らかになった。1923年の地震の記事については、雑誌記者の視点から、インタビューに応じた女性の美しさ、着物、髪の毛、匿名への拘りに強い関心が向けられており、それらがヘミングウェイ自身の日本人女性に対する捉え方を示唆するものと考えられることを指摘した。

ヘミングウェイがパウンドに送った手紙で言及されている‘Kumae’氏をめぐって、ヘミングウェイと一人の日本人との意外な関係が明らかになった。また、そのこととの関係で浮かび上がってきた『移動祝祭日』の記述を通じて、ヘミングウェイの日本人画家の絵画に対する関心の一端を窺うことができた。また、そこに彼が見出そうとしていた神秘的な特徴には、地震の記事において記者が女性に見出したそれに通じるものがあるようにも思われる。

小論での考察において明らかになったいくつかのことを考え合せると、ヘミングウェイが日本の文化的、芸術的な点において抱いていたと思われる印象の一面を窺うことができるのである。

注

1. パウンドと久米民十郎との出会いの経緯については角田史郎「パウンドと久米民十郎の交友」『エズラ・パウンド研究』福田陸太郎、安川昱編、山口書店(1986年)11-15頁で詳しく記されている。
2. 角田史郎の研究によると「パウンドは民十郎の絵の一枚をパリの自分の部屋に飾っていた」とのことである。角田史郎「パウンドと久米民十郎の交友」『エズラ・パウンド研究』14頁参照。
3. 福田陸太郎「日本におけるヘミングウェイおよびフォークナー文献」『比較文学』第3巻、日本比較文学会(1960年)105-120頁参照。
4. 高村勝治『ヘミングウェイ』研究社(1955年)「はしがき」iv頁参照。

引用文献

- Hemingway, Ernest. “Japanese Earthquake” *The Toronto Daily Star*: 25 (September) 1923. in *Hemingway By-Line*. Ed. William White. London: Grafton Books, 1967. pp. 104-110.
- . *A Movable Feast*, New York: Scribner's, 1964.
- . *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.